

アメリカ史記述の越境化と日本人の国際移動

——移民史の枠組みの解体と再構築に向けて——

米山 裕

はじめに——アジア系アメリカ人研究の諸問題——

一九九〇年代に至るまで、アメリカ合衆国における移民史の研究は、特定の移民集団とそれを取り囲むアメリカ社会との関係に注目してきた。この基本的な姿勢は、一九二〇年代に盛んに「移民問題」に取り組んだシカゴ学派が作り出したものである。なかでもW・I・トマスやロバート・E・パークは、移民集団が母国文化を捨ててアメリカ社会に「同化」することを規範的な現象と考え、いかにして同化が進行するかを解明しようとした。このような姿勢は、当時のアメリカ社会の問題関心を反映していた。移民は基本的にアメリカ社会にとって異質で犯罪、貧困といった「問題」を引き起こすやっかいな集団だと考えられていた。移民問題は国家のあり方にも関わる重要な政策課題の一つだった。そして、アメリカ社会は、厳しい移民制限を施行すると同時に、国内に居住する移民集団に対しては、彼らを「教育」して「同化」・「国民化」する半強制的な同化政策を取ることを選択したのであった。移民研究は、このような歴史的文脈のなかで、政策立案者、社会改革運動家などと問題関心を共有する研究者によって、始められた^①。

だが、アメリカ社会は、同化政策において最初から黒人、アメリカ先住民、日本人を含むアジア系の非白人諸民族を、厳しい差別、隔離、排除の対象にした。彼らは、ヨーロッパ系移民と比べて同化が難しいよう

に見えた。排斥をおこなった人々は、非白人の文化的異質性、遺伝的劣等性を強調し、同化は不可能であると論じた。一方、パークらは、同化が起こらないとすれば、その原因は移民自身だけではなく外部社会にも求められなければならないと考えた。原因が移民であればその文化の特殊性を解明する必要があるし、移民に同化の意志と能力があるならば、差別や偏見を同化の阻害要因として研究する必要がある。そのため、アジア系移民とその子供たちについては、ヨーロッパ系移民との相違を見いだせる興味深い特殊事例として、多くの研究がおこなわれた^②。このように、アジア系移民の研究はその出発点から、アジア系の特殊性とアメリカ社会の排他性を強調する傾向を内包していたと言える。

アメリカ合衆国における移民史研究は、このようなシカゴ学派の視点を受容することから始まったので、ヨーロッパ系移民の同化を基本的なテーマとして持つことになった。そして、二〇世紀中頃の認識ではアジア系に対する差別は解消するよう見えなかったため、アメリカ民主主義の欠陥を指摘する意図を持って、白人研究者がアジア系移民・アジア系アメリカ人の歴史を、同化ではなく差別や偏見を基本的なテーマに描くようになった。一九世紀に中国人が激しく排斥されたことはよく記憶されていたし、日系人が第二次世界大戦中に強制収容されたことは直近の事件であった。その結果、アジア系移民の主体性が過小評価され、差別、迫害の「対象」としてのみ描かれる傾向が強くなった。中国人・日

本人移民の研究として書かれ、そして読まれた研究が、実際は白人迫害者の研究である、という事態が長く続いたのである。

過去三〇年間のアジア系アメリカ人研究は、このような白人リベラルの研究を包含しつつ、黒人の公民権運動をモデルにして、アメリカ社会における差別を指弾し、是正を迫ることを目標の一つとして持った。アジア系アメリカ人研究が、社会改革運動の性格を持っていたために、一般のアメリカ人がアジア系の人々に対して持つイメージを大きく変えさせることになったことは否定できない。さらに、アジア系アメリカ人の高等教育・研究における制度的進出も進み、継続的な知的生産が可能にもなった。アジア系人口の少ない東部においても、多くの大学でアジア系アメリカ人研究を専門教育課程として位置づけ、専任教員を配置するようになったのである。

アジア系アメリカ人研究が高まりを見せると、アジア系移民の主体性を主要なテーマとして歴史を書き換えようという試みが、アジア系アメリカ人の歴史研究者によって二つの方向からなされた。その一つは、声なき民であった彼らの生活史を掘り起こし、記録しようというものである。一九七〇年代以降、アメリカ史研究の主流となった社会史、民衆史と連動して、オーラルヒストリーの実践、移民言語資料の収集保存などが進められ、そのような新しい資料コーパスを利用して、多くの優れたコミュニティ研究や伝記的研究が生み出された。もう一つは、前者と呼応しつつも、よりラディカルな労働史研究の立場からアメリカの支配体制を否定し、少数者が抵抗運動という弁証法的「反定立」^{アンチテーゼ}を提示してきたことを肯定的に評価しようとするものである。こちらは、公民権運動、コミュニティ運動、反戦運動、アジア解放運動などと連動しつつ、アメリカ史学史上の「修正主義」叙述に貢献した。

しかし、こういった試みがアメリカ史の歴史研究になした貢献は、意

外に小さかったと言わなければならない。第一の社会史は、アジア系移民・アジア系アメリカ人が、差別、迫害といった困難に立ち向かい、自らの運命を切り開く努力とその成果を掘り起こし、描こうとしたが、それはただちにアメリカ的「成功物語」に回収されてしまった。そのことは、社会学者が「成功」を好んで定式化したことから見て取れる。ハリウッドの世代モデル、エドナ・ボナシッチの媒介者モデル、さらにウィリアム・ピーターソンの模範的少数者モデルなどは広く知られるようになり、アジア系のイメージを固定することになった。いずれにせよ、アジア系移民が差別や偏見に負けずに努力を続けた結果、子や孫の代にアメリカ社会に参入を果たした、というこの物語は、ヨーロッパから新天地を求めて渡来し、「荒野」を切り開き、イギリスの「圧政」と闘ってアメリカ社会を築いた、というアメリカの創成神話と同じ構造である。つまり、社会史的記述が示した「主体性」とは、無毒化されて、一般のアメリカ人が容易に受け入れることのできるようになった、「安全」な少数民族の自我・アイデンティティに他ならなかった。

一方、第二の批判的歴史研究は、アメリカの成功神話を否定し、少数派の絶え間ない戦いを記述しようとしたが、このようなアジア系アメリカ人史の試みもアメリカ労働史全体の書き換えにあまり貢献することができなかった。それは、批判的歴史叙述が、アメリカ社会における差別や少数者排除を本質的問題として取り上げる一方で、アジア系アメリカ人自身は資本家に搾取された諸集団の中に埋没させられ、独自の歴史的役割を獲得することができなかったからである。アジア人移民は、低賃金の契約労働者として渡米したり、前近代的な労働「ボス」に組織されたスト破りによって雇用を獲得したりして、白人労働者に敵対することも珍しくなかったのだが、それはそれで、「アメリカ人」労働者文化に同化しない労働者の敵として歴史記述から抹殺されてしまった。いずれ

にせよアジア系移民、アジア系アメリカ人は、少数の例を除き、体制に對抗する輝かしい闘争の歴史を持たないことになり、ラディカルな歴史叙述の主役たり得なかった。

このように、アジア系アメリカ史研究の有する、主体性の重視、体制批判のいずれのアプローチも、アメリカ史の全体像を揺るがし、書き換えを促すようなインパクトを持ち得なかった。このような研究は、個人的かつ非本質的、つまり省略可能・他の集団の記述によって代替可能な「挿話」をアメリカ史に付け加えたに過ぎないのである。

一方、筆者を含め、社会史を実践する多くの歴史研究者は、アジア系アメリカ史研究の明確な政治性を回避してその周辺にとどまり、実証的なコミュニティ研究を試みてきた。そして、特定の地域社会の研究を精査し、それを積み上げることによって、新しい全体像が出現することを期待してきた。このような研究も三〇年にわたる実績を有するが、今だに全体像を見渡すのに必要な臨界量を蓄積するには至っていない。

我々は、マイノリティと権力・ホスト社会との関係をもう一度検討する必要があるのではないだろうか。それによって、被害者史観でもなく、成功神話でもない、アメリカ社会との関係が見えてくるはずである。人数が小さいから無視できる、といった議論に對抗するためには、構造的な理解が必要なのである。アジア系アメリカ人の歴史研究が意義あるものであるとするならば、彼らの歴史的役割が独自のものであると同時に、アメリカ社会に対して大きな影響を与えたことを示すような研究成果の提示が必要である^④。

本論では、第一に、アジア系アメリカ人、とくに日本人移民をアメリカ西部地域の社会経済的な構造の中に位置づけ、彼らがアメリカ史の極めて重要な転換点に位置していたことを示す。第二に、ローカルな経済の中で、移民の社会編成原理が有利に作用したこと、エスニック・タウ

ンが不可欠な役割を果たしていたことを示す。そして、第三に、伝統的なアメリカの価値観の中で、否定されるべきものとして扱われてきた低賃金移民労働者を再評価する可能性について論じる。

西部社会とアジア系アメリカ人

日本人は、世紀転換期から二〇世紀前半にかけて、アメリカ合衆国西部地域に労働者として渡ったが、この時代は、アメリカ西部にとって転換期であった。アメリカ西部は、資源収奪的「フロンティア」経済から、定着的経済への移行を進めつつあった。

この地域は、一九世紀前半までは新大陸スペイン領土の北西端の辺境であり、太平洋貿易を通じて、むしろフィリピンとつながっていた^⑤。しかし、一九世紀半ば、米墨戦争によって合衆国に併合され、同時にゴールドラッシュを契機に東西交通が促進されたことによって、合衆国経済圏に組み込まれていった。特に、一八七〇年代以降の大陸横断鉄道建設を契機に、東部市場に対する資源供給地としての役割を強め、西部は激しい資源収奪の場と化した。一八四九年のカリフォルニア・ゴールドラッシュ以降も場所を変えつつ採掘が進められた貴金属や他の鉱石、北西部の豊かな森林から得られる毛皮と木材、未開拓の平地を粗放・収奪的に耕作した小麦、そして西部諸河川を遡上する鮭などはその例であり、いずれも資源が枯渇するまで徹底的に採取され、東部に送られた^⑥。

このような自然の収奪の利用は、西洋あるいは近代資本主義が世界に拡大する過程で、資本主義世界と接触したがまだ取り込まれていない「外部」において、典型的に見られたものであった。組み込まれていないがために、資源の入手コストはただ同然であり、再生産や持続的利用は全く考慮されなかった。環太平洋の諸地域は、一九世紀後半に同時に

「外部」として利用されるようになった。アメリカ合衆国、オーストラリア、アラスカでは次々にゴールドラッシュが起こったし、環太平洋沿岸全域で、ラッコやアシカなどの毛皮資源の乱獲が起こった。日本の開国も、このような環太平洋地域の変容の一環として起こった事件である。アメリカ西部では、輸送には鉄道が、鉱山では蒸気機関が、そして鮭の加工には缶詰が用いられ、自然の収奪は機械を利用して徹底的におこなわれたのである。

しかし、自然の収奪の利用を可能にしたのは機械の利用だけではなかった。人口が希薄で資本の不足していたアメリカ西部地域では、安価な労働力を大量に供給、利用する仕組みが必要であった。そこで決定的な役割を果たしたのが、一九世紀半ばから不自由労働力として導入された中国人と、一九世紀末から中国人の代替労働力として使われた日本人であった。中国人は、まず鉱山労働力、鉄道建設労働力として使用され、西部の「開発」に重要な役割を果たした。近年のアメリカ西部史においては、自然環境や資源と同様に、中国人・日本人を含む少数民族も、アメリカ白人によって収奪された、とする議論が受け入れられている^⑧。しかし、自然との関係においては白人（白人資本家）と共同作業を行ったのであり、従属的な立場ではあったが自然を収奪し、経済「開発」を進める役割を果たしたのだと考えるべきである。

鉄道や鉱山と違い、歴史研究の対象となるのが遅れたが、それに劣らず重要なのが、食品の採取と加工である。都市社会が成立するために、絶対に必要なのが都市外部からの食糧供給であった。この問題は、一九世紀に工場労働者が増加し、都市が巨大化するにつれ、より大きな課題となった。西洋近代では、自然の状態にある動植物を無主物として早い者勝ちで採取・捕獲し、経済的利益を上げることが当然だと考えられ、実行された。イギリス系の社会が急速に拡大し、征服を続けた北米大陸

では、特にそれが顕著だった。例えば、一九世紀初頭には北米大陸に五〇億羽生息していたと推定され、東海岸では最も個体数の多い鳥であった旅行鳩は、食料、家畜の餌、羽毛の原料として、あらゆる手段を用いて捕獲され、同世紀中にはほぼ絶滅した^⑨。同じくアメリカ・バイソンは、一九世紀初頭に数千万頭生息していたが、食肉、皮革、娯楽のために乱獲され、世紀末には数百頭にまで減少した。

カリフォルニアからブリティッシュ・コロンビアにかけての鮭も、先住民社会を数世紀にわたって支えた豊かな食糧資源であったが、白人参入とともに乱獲によって短時間で消滅する、という典型的な道をたどった。東部沿岸地域での鮭資源の枯渇に直面した缶詰製造業者の一部が、一八七〇年代から、大陸横断鉄道による東部都市への出荷の可能性が惹かれて移転してくる。彼らは、西部でも流域ごとに資源を取り尽くしては次に移転する、といった経営を続けた。その結果、二〇世紀初頭には、河川を遡上する鮭を獲る漁は成立しなくなり、沖合漁業に移行するに到る。このような過程で進展した鮭漁および加工において、中国人移民、のちには日本人移民は大きな役割を果たした^⑩。

このような自然収奪型の経済発展は、やがて白人人口の増加をもたらし、それに従って、持続的な定着経済の移行が進むことになる。東部の大市場に向けた生産活動が主要な産業となり、都市が成長し、それを核として、地域的経済のネットワークが形成されるのである。

西部における日本人空間の創成と編成

日本人移民はこのような西部社会の転換期に、その新しい労働力需要に応える形で渡米し、生活空間を創出していった。ここでは、新しい西部のあり方を象徴する都市として、ロサンゼルスを取り上げ、それと日

本人移民の関係を考察したい。

ロサンゼルス日本人社会は、ロサンゼルスという都市の形成過程と密接に関連しつつ発展した。ロサンゼルスは、二〇世紀初頭に農村と漁村の集合体から大都市へと変貌を遂げる。日本人は、ロサンゼルスが発展する中でそのニーズに答える形で参入し、それが日本人社会を特徴づけた。日本人社会は、ロサンゼルス中心地（下町、ダウンタウン、小東京などと呼ぶ）、南部の港湾地区、近郊の農業地域の三つに分かれていた。下町は、情報、物流の中心地であり、貿易商、小売店、サービス業、出版業などが集まっていた。初期には、ロサンゼルス白人社会に寄生するような移民社会が形成された。庭師、洗濯屋、あるいは住み込みのハウス・ボーイなど、急速な都市化に伴って増加した白人家庭に対してサービスを提供した。これらは無資本、あるいは比較的低資本で始められた。一方、旅館、食堂、職業斡旋などは、日本人向けのサービス業であるが、その中心に位置するのは「桂庵」と呼ばれた職業斡旋業者で、彼らは南加地方の農園雇用主と季節労働を希望する日本人を仲介する役割を果たした。一九世紀末の南カリフォルニア地域では、アグリビジネスによる大規模な農園開発が進み、播種、植え付け、収穫時に多数の労働者（ギヤング）を必要としたのである。さらには、世紀転換期の南カリフォルニア地域の日本人は、農場労働にせよ、建設労働にせよ、白人労働者による労働争議が起こると、機動的にスト破りの要員を供給する、という形で業界に参入、あるいは特定雇用者との関係を開始するするきっかけをつかむことも多かった。斡旋業者（ボス）は、不慣れた新参者に対し、宿泊・食事提供、通訳、切符手配、法律相談などの多様なサービスを提供する一方、季節・移動労働者の賃金をピンハネし、急速に資本を蓄積して「移民中産階級」化を果たしたのも多かった。初期の有力者には、貿易、出版、旅館、など様々な分野に投資するものが多く、上記の職業

にはつきりした区別はなかったと考えるべきであろう。^①

また、彼らは、経済的な視点に限って見ると、移民史研究で一般的に言われるように労働者階級から中産階級に「上昇」したように見えるが、実際は、おそらく最初から中産階級であった。ここでは、中産階級と労働者がセットになった、エスニックな労働力配給システムに我々は注目すべきである。ある程度の英語は話せるが肉体労働を嫌悪する武士出身の書生渡米者と、肉体労働は厭われないがアメリカで社会的技能を有しない農村出身の出稼ぎ渡米者の利害がここにおいて結合し、在米日本人社会が農業に基礎を起きつつ、その周辺分野へ発展してゆく基礎ができたのではないかと、阪田安雄の仮説は、真剣な検討を要するであろう。^②

ロサンゼルス南部のロングビーチやサンピドロには、一九世紀末より海軍基地や海外貿易に利用できる港湾施設の建設が進んだ。日本人の定着は下町より遅れるが、一九一〇年頃から日本人漁業の中心地として発展してゆく。もともとカリフォルニアの漁業はイタリア人が独占していたが、彼らは主に市場向けに魚を獲っていた。そこに日本人が缶詰会社に原料として直接一括納入する形で入り込んでいったのである。日本人漁民は、缶詰会社が用意した社宅に住み、日本人だけの近隣地区を形成し、日本的な文化・社会システムを再構成したが、基本的には大企業の労働者の存在であった。さらに、市場向けに漁業を営んでいた日本人も存在した。彼らは、自分たちで組合や卸売市場を経営し、近郊農業で見られたのと同じ垂直統合をなしとげた。短期間ではあったが、缶詰加工においても、一九一〇年代に日本人資本家が共同でターミナル・アイランドで缶詰工場を経営していたことがあった。^③

同じ頃、ロサンゼルス市自身も積極的な拡張政策のもと、北カリフォルニアから運河を建設して水源を確保し、サンピドロを合併して自前の港湾を入手し、貿易、運輸の基地として開発することになる。このよう

に、南部港湾地区と下町地区は、市の政策によっても固く結びつけられることになった。^④

鉄道網の建設によって全国の消費地と結びつけられ、急速な人口増加を見せるロサンゼルスに青果物を供給する役割を担ったのが、日本人近郊農家であった。一九一〇年頃には、日本人経営の小規模農園が多数出現しており、苺、野菜、花などに経営資源を集中した。^⑤それに伴い、日本人も設立に加わった農産物の市場が下町に設けられ、農業関連産業は下町地区の日本人社会における比重を高めていった。南川文里が論ずるように、一九二〇年代には、日本人による青果生産・流通・小売業の垂直統合がなされたのである。^⑥だが、傷みにくいもの、加工が必要なもの——特に樹木性の果物——は、大資本による独占が進み、日本人は労働者として以外は進出できなかった。

漁業、農業における日本人の存在感が増大したこと、特に漁船所有者、農場所有者として白人との競争に参入したことは、激しい排日運動の原因となった。一九一〇年以前の排日が異質な労働者としての日本人を排除することを目的としたのに対し、一九一〇年以降、特に外国人土地法に見えるように、日本人の財産権を制限する方向へ焦点が移ったことは、競争の質が変わったことを反映しているのである。日本人が排日運動に對抗し、自らの繁栄を守ろうとしたとき、法的な権利確保が極めて重要な問題となった。そして邦人社会内において、有力資本家の集まりが重要な役割を果たすことになった。羅府日本人会はそのようなロサンゼルス地区の日本人公共団体として形成され、発展した。

やがて羅府日本人会の権力を掌握したのは、県人会の連合勢力の形態をとった農業勢力であった。日本人会の選挙には、青果市場、花市場、仲買人、農会などから新しい世代の指導者が送り込まれ、その結果、羅府日本人会から漁業関係者は排除されることになった。もともと彼らに

は、法的な権利を守るために政治的組織に頼る必要はなかった。彼らは漁船を所有しており、小資本家と呼べないことはない立場にあったが、大会社の長屋社宅に住み、漁獲をそのまま工場に出荷するような体制の中で、労働者的階級意識を強く持つようになっていた。そしてその一方で、日本人の漁業権を制限するような排日立法の動きに対しては、会社に政治的影響力を駆使して守ってもらおう共生関係を築いていたのである。^⑦

しかし、結局、農業家も羅府日本人会を必要としなくなっていた。日本人農業の繁栄のためには、小さすぎたからである。ロサンゼルスには農産物市場も多数あり、日本人農家にとって重要な戦略的地区であったが、羅府日本人会はその一地区の日本人会に過ぎなかった。一方、上部団体の南加中央日本人会は、南加地方を中心とする各地の日本人会から代表と分担金を集めて運営されていた。ガーデン平原、サンゲイブリエル平原、サンフェルナンド平原、オレンジ郡、サンディエゴ郡、インペリアル平原（帝国平原）など、日本人農業はロサンゼルス以外の農村地区でも繁栄していった。^⑧南加中央日本人会は、農家の支援を基本業務の一つと考え、専任の技師を雇用し、各地に派遣して技術指導を行い、遠隔農業地域の連携強化に務めた。このようにして、南加中央日本人会は、日本人農家にとってより重要な団体として地位を高めるのである。

農民が、南カリフォルニア地域に食糧を供給するという役割を担い、二〇世紀前半にロサンゼルスを中心とする南カリフォルニアが急速に発展、拡大するのを可能にしたとすれば、漁民は、漁業という経済活動を通じて、他民族と日常的接触を行い、漁業生産物を販売することを通じて、南カリフォルニアを超えて、アメリカ合衆国経済、世界経済に直結した立場にあった。

彼らは、連邦予算で整備された島（ターミナル・アイランド）に、スロベニア系、イタリア系住民と混住していた。いずれのグループにおいて

も、男は漁業に、女は島内の缶詰工場での作業に従事した。移民たちの意識は、出身国別にはつきり分かれ、別個の共同体を形成していた。しかし、漁業においては、同じ海域で鮪・鰯漁を行い、相互に競争すると同時に、新漁法は直ちに他グループに伝わり、他都市を基盤とする漁業者や、魚を買い取る缶詰業者に対抗する共通の利益を有していた。また、缶詰工場の女性労働者は、民族別の労務管理を受けつつも、共同でストをすることも可能であった。

さらに、缶詰産業の発展を後押しした近代的鰯・鮪漁を生み出すのにも、移民のインターエスニックな関係が大きく貢献していた。その誕生には、漁船を高速化・大型化して大量捕獲を可能にした近代テクノロジ―とともに、一本釣り、撒き餌といった漁法を持ち込んだ日本人漁民と、地中海式の巻き網を持ち込んだ地中海地域出身の漁民との競争と相互学習（漁法の盗み合い）が不可欠だったのである。

そして、その缶詰は国内市場だけではなく、世界市場で販売された。ちょうどターミナル・アイランドの缶詰産業が立ち上がると同時に、欧州で第一次世界大戦が勃発し、それを契機にアメリカ産の缶詰は、大量に欧州に流れ込み、その後も世界商品として流通し続けるのである。

おわりに―今後の研究に向けて―

一、エスニック／ローカル／グローバルなつながり 日本人移民（および他のアジア系移民）は、西部社会の形成において、一定の不可欠な役割を果たした。そして、それはアメリカを越えて世界につながる役割になることもあった。移民の歴史的体験を、個人的苦労や、差別との闘い、アイデンティティの危機といった問題に限定してしまうことは、移民体験の基層にある最も重要な、生活、人生の社会経済的位置づけを彼らから

剥ぎ取ることになってしまう。彼らを労働者として認識し、彼らの職業的活躍を分析、評価して、その上でアイデンティティやコミュニティの問題に立ち返ることが今後の移民研究には必要である。

二、コミュニティの役割 初期の、ボストン労働者の協働関係は、労働力を機動的に供給できるという点で、白人労働者との競争において、雇用に利するところが大きかった。この特徴は、現在の先進国社会でも見られるもので、労務管理や労働者の生活までエスニック側が担当することで、雇用者側はコストを下げることであった。また、農業・漁業に進出した時期においても、エスニック・タウンが情報の結節点として作用したことで、社会的統制や労働力の再生産まで引き受けたことよって、やはりアメリカ側のコストを引き下げるようになった。コミュニティは、このようにエスニック経済をサポートする重要な役割を果たしていた。

三、非白人労働者の再評価 移民は基本的に安価で移動性が高い労働力として各地で活躍した。もちろん、賃金や労働条件をめぐる対立は常に存在していたし、時に暴力的な事件に発展することもあったが、移民を雇用する経営者と移民自身は、経済的な相互利益の一致を認識していた。移民という安価な労働力の導入は、機械の導入と相まって、伝統的生産様式を破壊し、アメリカ社会に効率的で生産力が高く、豊かな近代をもたらし²⁰た。そして、その過程で、職人や独立自営農民は排除され、伝統的白人中産階級は破壊されていったのである。このような移民の役割を、単に非難するのではなく、社会変革の原動力として評価し直すことも必要ではないだろうか。人種のマイノリティを労働者としてアメリカ史の叙述に取り込むには、アメリカ史の中に基底意識として織り込まれた白人労働者擁護の言説を脱構築することがまず必要となるのである。

本研究は、平成二二―二四年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (一般)「欧米史上におけるマイノリティとその迫害・差別・救済の比較的研究」(研究課題番号二二四一〇一〇二) 中谷猛(代表)の研究成果報告書に所収の「二〇世紀前半のアメリカ西部社会と日本人移民」を大幅に加筆・修正したものである。この内容は、二〇〇三年二月二三日に京都大学人文科学研究所「人種の表象と表現をめぐる学際的研究」研究会と京都大学文学研究科主催で開催されたシンポジウム New Wave: Studies on Japanese Americans in the 21st Century に於て「Placing the Japanese Immigrant Community in the Time-Space of Early Twentieth-Century American West: The Nexus between the Japanese Association and the Local Economy」として口頭報告し、シンポジウムと同名の報告集 (Brian Masaru Hayashi and Yasuko Takezawa, eds., Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 2004) に掲載された。コメントや質問を下された方々に感謝する。

- ① シカゴ学派については、中野正大・宝月誠『シカゴ学派の社会学』(世界思想社、二〇〇三年)を見よ。
- ② シカゴ学派によるアジア系移民・アジア系アメリカ人の研究については Eileen H. Tamura, "Using the Past to Inform the Future: An Historiography of Hawaii's Asian and Pacific Islander Americans," *Amerasia Journal*, 26: 1 (2000): 55-85 が参考になる。日本人移民の研究と「同化」概念の問題については、米山裕「国内問題としての移民研究とアメリカ史の伝統」『移民研究年報』第五号(一九九八年)八六―九一頁、及び「同化論と日本人会の研究―日本人会研究の新視角」『立命館文学』(立命館大学文学会)第五五八号(一九九九年二月)三四―三五四頁を参照。
- ③ Harry H. L. Kitano, *Japanese Americans: The Evolution of a Subculture* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1969); Edna Bonacich, "A Theory of Middleman Minorities," *American Sociological Review*, 38 (October 1973): 583-94.; William Petersen, "Success Story, Japanese-American Style," *New York Times Magazine*, 6 January

1966, 20-43.

- ④ ロナルド・タカキ『多文化社会アメリカの歴史―別の鏡に映して』富田虎男監訳(明石書店、一九九五年)にはこのような方向性を見て取ることができる。たとえば、第八章の中国人労働者とカリフォルニアの開発について、正当な評価が見られる。しかし、全体として民族的挿話の集合体になってしまい、多元的なアメリカをどのように提示するかについて、十分な成果を挙げられたとは言えない。
- ⑤ A. Jimenez, "The Spanish Far North: How to Avoid Using the Terms 'American West' and 'Spanish Borderlands,'" *Colonial Latin American Historical Review* 5 (Fall 1986): 381-412.
- ⑥ William G. Robbins, "The 'Plundered Province' Thesis and the Recent Historiography of the American West," *Pacific Historical Review* 55 (November 1986): 577-97; Richard White, "Race Relations in the American West," *American Quarterly*, 38: 3 (1986): 396-416.
- ⑦ 一九〇〇年頃から鮭の加工の機械化が進められた。Patrick O'Bannon, "Technological Change in the Pacific Coast Canned Salmon Industry, 1864-1924," (Ph.D. dissertation, University of California, San Diego, 1983), 193-212; Duncan A. Stacey, *Sockeye and Timpplate: Technological Change in the Fraser River Canning Industry, 1871-1912*, British Columbia Provincial Museum Heritage Record, no. 15 (Victoria: British Columbia Provincial Museum, 1982).
- ⑧ Patricia Nelson Limerick, *The Legacy of Conquest: The Unbroken Past of the American West* (New York: W. W. Norton & Co., 1987), Howard R. Lamar, ed., *The New Encyclopedia of the American West* (New Haven: Yale University Press, 1998).
- ⑨ Allan W. Eckert, *The Silent Sky: The Incredible Extinction of the Passenger Pigeon* (Boston: Little, Brown & Co., 1965).
- ⑩ Daniel B. DeLoach, *The Salmon Canning Industry*, Oregon State Monographs, Economic Studies, no. 1 (Corvallis: Oregon State College, 1939); Chris Friday, *Organizing Asian American Labor: The Pacific Coast Canned Salmon Industry, 1870-1942* (Philadelphia:

Temple University Press, 1994). 鮭の加工において機械化が進んだのは、一八八二年排華法によって、安価な雇用の継続が困難になった中国人熟練労働者の代替生産手段が必要になったことが大きな動機であった。

- ⑩ 日本社会の空間的編成に関しては、南川文里「エスニック・タウンの経済的編成—リトルトーキョーの初期形成過程を通して」『移民研究年報』第七号（二〇〇一年）一〇一—一四頁を見よ。桂庵については、Yuji Ichioka, “Japanese Immigrant Labor Contractors and the Northern Pacific and the Great Northern Railroad Companies, 1898–1907,” *Labor History* 21 (Summer 1980): 325–50を参照。John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles, 1900–1942* (Urbana: University of Illinois Press, 1977) は、ロサンゼルス日本人社会に関する唯一の包括的研究であるが、基本的には、ボナシッチの媒介者モデルを利用したコミュニティ研究である。Bonacich, “A Theory of Middleman Minorities,” 及び Edna Bonacich and John Modell, *The Economic Basis of Ethnic Solidarity: Small Business in the Japanese American Community* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1980) を参照。

- ⑪ 阪田安雄「渡り鳥 (birds-of-passage) とその社会—秘められた過去」同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期—「福音会沿革史料」を手がかりに』同志社大学人文科学研究所研究叢書（現代史料出版、一九九七年）五七—五九頁。
- ⑫ 一九一四年に設立された北米まぐろ缶詰会社は、資本金七万五千ドルで経営を始めたが、わずか三年後、白人資本家によって二五万ドルで買収された。富本岩雄『在米和歌山県人発展史』(Sacramento: 富本岩雄、一九一五年)、一三三—一三三頁；藤岡紫朗『歩みの跡—北米大陸日本人開拓物語』(Los Angeles: 歩みの跡刊行後援会、一九五七年)、五二—五三頁を参照。

- ⑬ Ernest Marquez, *Port Los Angeles: A Phenomenon of the Railroad Era* (San Marino, CA: Golden West Books, 1975) には、サンタモニカの日本人漁民居住区の記述がある。港湾建設をめぐるサンタモニカとサン

ジエロの「競争」については、サンジエロ = Pacific Electric = Henry E. Huntington 側の勝利記録ではあるが、Charles Dwight Willard, *The Free Harbor Contest at Los Angeles: An Account of the Long Fight Waged by the People of Southern California to Secure a Harbor Located at a Point Open to Competition* (Los Angeles: Kingsley-Barnes & Neuner, 1899) が詳しい。市民の足とじて、タウンタウンとサンジエロは一九〇五年に路面電車と直結された。Electric Railway Historical Association of Southern California, “Pacific Electric: San Pedro via Dominguez Line,” <<http://www.erha.org/pesspd.htm>> 二〇〇六年一月五日参照；Tom Wetzel, “Pacific Electric’s Los Angeles to San Pedro via Dominguez Line,” <<http://www.uncanny.net/~wetzel/describe.htm>> 二〇〇六年一月五日参照。日本人は、PEの建設労働力を提供した。初期のロサンゼルス日本人社会の記録を書いた三枝治三郎は、「当時建設の緒に就いた太平洋電鉄会社がこの日本人工夫に着目し最初五十名を使役しこれを試験した結果、その技量の優秀なることを認めて漸次に増加して其の盛時に於いては優に二十名以上に達した。現に羅府を中心として南加各地に通ずる太平洋電鉄（俗に言ふ赤電車）線路の過半は日本人労働者の手に成れるものである。」と誇らしげに述べている。南加日系人商業会議所『南加州日本人史』（ロサンゼルス：南加日系人商業会議所、一九五六年）、五六—五七頁。この場合もきっかけはスト破りであった。

- ⑭ Masakazu Iwata, “The Japanese Immigrants in California Agriculture,” *Agricultural History* 36 (January 1962): 25–37; idem, *Planted in Good Soil: The History of the Issei in United States Agriculture* (New York: P. Lang, 1992); 矢ヶ崎典隆『移民農業—カリフォルニアの日本人移民社会』（古今書院、一九九三年）。
- ⑮ 南川文里「エスニック・ニッチの確立と移民のエスニック化—ロサンゼルス日系移民都市商業の歴史的展開を通して」『日本都市社会学学会年報』第一八号（二〇〇〇年）八二—九九頁。

- ⑯ Kanichi Kawasaki, “The Japanese Community of East San Pedro, Terminal Island, California,” (Master’s thesis, University of Southern

California, 1931); 米山裕「羅府日本人会役員選挙と在ロサンゼルス日本社会の変容、一九一五年—一九二一年」『立命館史学』(立命館史学会) 第二二号(二〇〇〇年)一六一—一七頁。

⑱ 日本人農業を概観するには、米国産業日報社編『在米日本人産業総覧(羅府…米国産業日報社、一九四〇年)』が便利である。

⑲ このような、移民コミュニティの「効率性」に基づく持続性については、近年の国際労働力移動研究が参考になる。伊豫谷登士翁『グローバルゼーションと移民』(有信堂高文社、二〇〇一年)、森田桐郎編『国際労働力移動』(東京大学出版会、一九八七年)などを参照。ただし、このような現象が、現代社会特有のものとは必ずしも言えず、一世紀前に同

様の観察ができることは、歴史研究から応答すべきであろう。

⑳ もちろん、近代がもたらした様々な弊害や、今日のグローバル経済の先駆けと考えられる人口の流動化を批判的に分析していくことは必要である。しかし、ここでは、アジア系の移民の歴史的役割が労働史研究のなかで不当に軽んじられている現状を批判し、まず、「近代化」の過程においてアジア系移民が果たした貢献を認識することから始めなければならない、という意図からこのように論じた。

(本学文学部教授)